平成24年度厚生労働省「老人健康保健増進等事業」成果報告

東日本大震災の介護従事者に関する事例集

HIGASHINIHONDAISHINSAI

KAIGOJUJISHA-JIREISHU

はじめに

東日本大震災で被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げます。

東日本大震災の発生から 2 年が経過し、被災地では、応急対応から復旧・復興への取組が本格化してきています。それに伴い、各地域の介護の現場においても、自立的、持続的な介護サービスの提供に移行していくことが必要になってきていると考えられます。そのためには、被災地において、いかに介護の担い手（介護従事者）が継続的に就業していける環境を整備するかが重要になります。

一方、被災地では、震災を契機に介護の現場を離れる介護従事者も少なくなく、また、新たに介護現場に入ってくる人材を確保することも難しい状況にあります。被災地において介護の担い手を確保していくために、介護従事者が被災に伴ってどのような仕事上の問題や悩みを抱えているかを明らかにし、その問題や悩みの解消、さらにはモチベーションの維持向上を図っていくことが今後の重要なテーマであると考えます。

こうした被災地の状況をふまえ、本事業では、平成 24 年度厚生労働省「老人保健健康増進等事業」の採択を受け、被災地における介護従事者の時間の経過に伴う意識の変化を把握するための調査を実施するとともに、こうした被災地における介護従事者の問題を広く周知するため、介護従事者の生の声の記録および介護従事者への支援事例を収載した事例集をとりまとめました。本事例集が、関係者の皆様に資すれば誠に幸いです。

最後になりましたが、ご多忙のところ、本調査研究事業において実施しましたインタビューやアンケートなど各種調査にご協力いただきました皆様、本調査研究事業の実施にあたりご助言をいただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

株式会社浜銀総合研究所
取締役・地域戦略研究部長
三枝康雄

CONTENTS

p1
はじめに

p3
1●●●くさか里樹さんインタビュー

p7
2●●●介護現場で起きたこと、介護従事者が考えたこと

p15
3●●●被災地の介護従事者が語る

p18
4●●●介護従事者を支える取り組み

p22
おわりに

p23
有識者研究会委員名簿

本文イラスト●くさか里樹

1 くさか里樹さん インタビュー

Interview

介護をテーマとしたマンガ「ヘルプマン！」の作者であるくさか里樹さんは、東日本大震災の被災地の介護現場で起きていることを全国に伝えるべく、現地での取材に基づき「ヘルプマン！ 震災編」を執筆されました。

高知県にあるくさかさんの仕事場を訪問し、「震災編」を執筆された動機や被災地の介護従事者の方々へのメッセージを伺いました。

――3月11日に東日本大震災が発生したときの印象をお聞かせ下さい。

地震が発生したとき、私はちょうど美容院にいました。私自身、東北地方に知り合いがいたわけではないのですが、どんどんニュースで現地の状況がわかってくるにつれて、すごい災害だと感じました。

すぐ募金も始まったし、ボランティアで現地に行く人もたくさんいて、自分も何かしたいと思いました。実際何かできるわけではないけれども、そんなことをすればむしろ足を引っ張ることになるとわかっていても、現地に飛び込みたいと強く思いました。周囲の人たちは物資を届けたり、寄付をしたりしていましたが、自分としてはマンガで発信したいと思ったのです。ただ、思った瞬間にどんな言葉も当てはまらず、何も言えない自分の無力さを痛感しました。それでもやはり最終的にマンガに書くしかないと思いました。でも、そのためには現地の状況をこの目で見る必要がある。どうやって現地に入ろうかと考えていたときに、介護福祉士会がボランティアを募って現地に派遣すると聞き、一緒に連れて行ってもらえるように頼み込みました。スキルがないので、現地に行っても何もできない私がボランティアに混ざりこんでいいのか悩みましたが、行かないことには何もわからないので……。

――現地の状況を見て、どのようなことをお感じになりましたか。

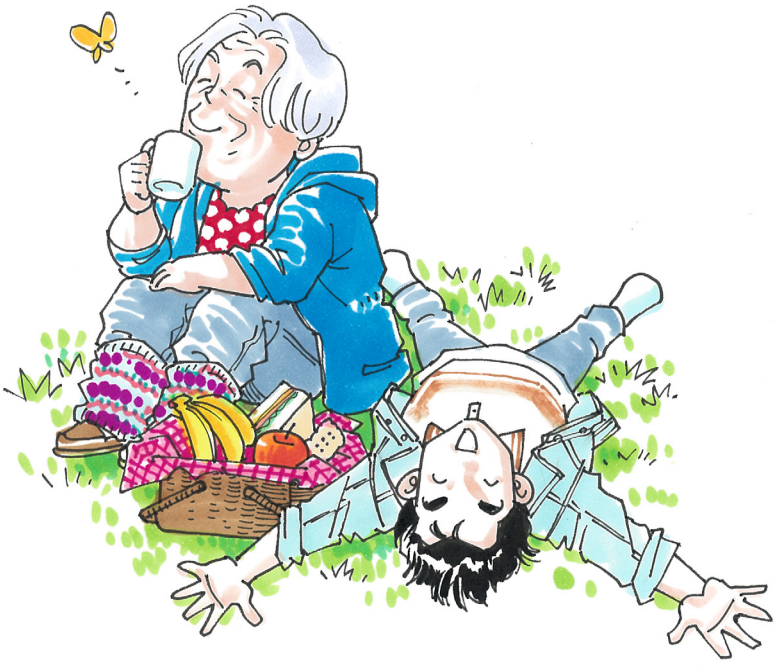
4月に現地に入ったのですが、私は被災している現場ではなく、避難所に行きました。その頃は現地の状況もかなり落ち着いていました。それまでずっと傍観者として報道を見ていて、「何かしないと」と思っていたのですが、支援を受ける人たちや「何かされている」人たちの中に入ったとき、支援のあり方が少し違うのではないかと感じました。単純にしてあげればいいってものじゃないという

ことが中に入ってよくわかりました。厳しい言い方かもしれませんが、自分の足で立たないと誰も立ち直れない。自立に向けた支援を行うことが必要なのでは、と感じました。

被災した当事者に、立ち上がれというのはかなりきつい話だと思います。たとえば、すべてを失って、何をどう頑張ったとしても、水の泡になってしまったような無力感を抱えた人に、自力で立ち上がれと言うのは厳しい。やらなきゃいけないと思ってもうまく立ち上がれない。そうした人たちに「頑張れ」というのはひどい言葉だと思うのです。だからといって、人に抱えられていて幸せになれるかといったら、そうではない。なんとか自分で歩かないと、傷ついたまま生きていかなくてはならないと感じました。どうやったらその人が自立して生きていけるか、国からの支援もそれほどなく、社会的資源もなくなっているなかで、どのように自立支援を行うべきか難しいと感じました。

――介護の現場はどのような感じだったのでしょうか。

自宅を流された方が親戚の家に避難し、最初のうちは助け合っていたが、いつまで面倒をみなければいけないのかというストレスのなかで、家族や親戚の関係がおかしくなってしまうケースもあると聞きました。こうした



状況を把握し、支援につなげていくコーディネーターというか支援する体制が、ほとんどなかったのではないでしょうか。

一方、介護の現場は理に適って動いているということを感じました。介護に携わっている人は、自分の与えられた場で最大限の力を発揮していて、プロとして動いている。とにかくちゃんと把握したことは他の人が一目瞭然にわかるようにノートに記録している。この人はこういうことに気をつけてくださいとか、こんなことで盛り上がったとか、事細かに記録してケアにつなげようとしている。また、避難所には日本赤十字から毎日医者が来ていて、ナースも常駐していたのですが、お腹の痛いおばあちゃんがどうしても治らない。薬でも治らないし、吐き気も止まらない。その症状を見て、介護職は「便を我慢しているんじゃないの？」とすぐに気がつきました。実際にそのおばあちゃんは、周りの避難者に気兼ねして我慢していた。そこで、その介護士は、マッサージしてちょっとずつ排便を促して、体調を治していった。こうした動きを見て、介護の底力をあらためて感じることができました。

それから、介護の人たちの動き方を見聞きしていると、とても逞しく、非常にサバイバル能力というか、状況に臨機応変に対応する能力が高いと感じました。大規模な避難所では高齢者が生活することができないと感じれば、すぐに場所を移り、支援物資がないなかで農家から食料を調達したりしています。日頃から直に人や生活に触れて鍛えられているのではないでしょうか。

――被災地の方々と接してお感じになられたことを教えてください。

最近、被災をされた方と話をする機会があったのですが、被災を乗り越えて成長したといったことではなく、心の傷はまだまだ癒えていないと思いました。被災地の人たちは、受けたダメージとずっと戦っています。一時期は、話をすることもできなかったと言っていましたが、そうした心理状態は私たちにはちょっと想像ができない。でも、その人は、最近になって、そうした自分の経験を外に発信することで心の負担を軽減することができるようになったと言っていました。

私は、訪問した避難所で似顔絵を描いていたのですが、ある若い女性が自分の状況を話してくれたことがありました。その方の自宅は、地域の人たちが集まってきて人の輪ができるような家でしたが、その人たちが震災で亡くなったとニコニコしながら涙を流して話をしていました。そして、その方は、また、友だちをつくりますと言った。これは、すごい言葉だと感じました。普通、そういう言葉

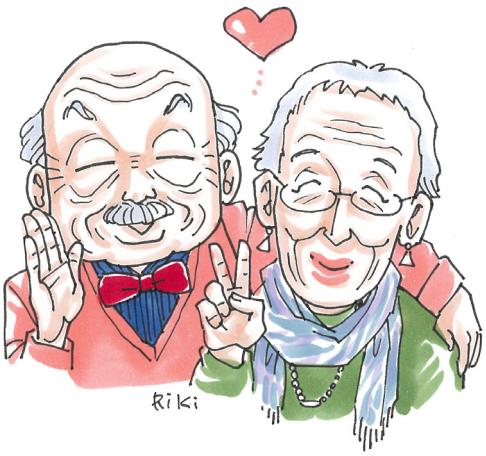
を死んだ友だちに対して吐けない。でも、それを言わなければ自分が生きていけない。被災された方は、そこの命に対するとらえ方がまったく違う。そういう人たちに対して、こうしたら、ああしたらと好き勝手なことは言えないと思いました。

いろいろな人の話を聞くと、自分は何もできないということを受け入れたうえで、ただ静かに寄り添うことしかできないのかもしれない。でも、無力感を感じ自覚していなければ、ただ「やってあげる人」になってしまうでしょう。

――「ヘルプマン！」について、「復興編」の執筆を予定されていると伺っています。その具体的な構想や被災地の方々へのメッセージをお聞かせ下さい。

被災地に関わった以上、「復興編」は書きたいと考えています。いろいろ取材して伺うなかで、世間が忘れた頃からが大変と聞きました。時間が立てば、状況が大きく改善しているわけではないのに助成金がなくなったり、そこからが大変だと。どこに焦点を当てるか今の段階ではわかりませんが、ニュースには取り上げられないリアルなことが拾い出せたらいいと考えています。マンガは、ただ事実をレポートするわけではありません。私自身、「ヘルプマン！」を通じて、常に同じメッセージを伝えたいと考えています。それは、人間の可能性です。復興編も、希望をもってもらえるようなメッセージを伝えられる作品にできればと思います。

被災地での活躍を通じて、介護現場で働く人たちのすごさは証明できたと思います。現地の方々は、災害に直面して大きなものを自分たちの中に取り込んで、それでも歩いています。被災をした方々が、その逞しさをもって日本の精神的な支柱としてこの国をリードしていってもらいたいと思います。



2 介護現場で起きたこと、介護従事者が考えたこと

Happening & Thinking

本調査研究事業では、東日本大震災被災地における介護従事者の方の仕事に対する意識を把握するため、被災地の介護従事者に対するインタビューを行いました。

インタビューは、(1) 被災地における介護従事者の仕事への意識（介護サービスへの従事意欲、仕事上の問題・悩みなど）を幅広く把握するためのグループインタビュー、(2) 被災地における介護従事者の被災後の仕事への意識の変化などをより詳しく把握するための個別インタビューの 2 つの方法で行いました。このうち、個別インタビューでは、被災から現在までの時間経過に伴う仕事上の変化（職場環境、仕事に対する意識など）、被災からの立ち直り（仕事を続けるうえで勇気づけられたこと、立ち直るきっかけ）、今後に向けて考えていることなどについて、お話を伺いました。

ここでは、グループインタビュー、個別インタビューで伺ったお話をもとに、被災地の介護従事者の方の生の声を交えながら、その結果の概要について紹介します。

1 被災地の介護従事者が体験したこと

東日本大震災から 2 年が経過し、その間、被災地の介護従事者を取り巻く環境は刻々と変化し、そのなかで介護従事者が置かれている状況や、それに伴って抱える課題も変化しています。

●●●被災直後

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、介護従事者も数多くの方が被災しました。インタビューにお応えいただいた方々も、職場で利用者の介護をしていた方、利用者の送迎中だった方、休暇などで自宅にいた方など、さまざまなかたちで災害に遭い、数日間から、長い人では数か月にわたり、平常時とは異なる状況への対応を迫られました。

そのなかで、利用者への対応として、たとえば、津波被害に遭った事業所では、水の中の利用者を救助したり、職員は腰まで水に浸かりながら利用者が水に浸からないようにテーブルの上に避難させるなど、過酷な状況

を体験された人もいました。また、利用者と一緒に避難した人のなかには、避難所での通常の介護が困難な状況への対応や、普段と異なる環境で不安を感じたり、パニックになった認知症の利用者への対応にも迫られました。また、交通や通信状況が混乱するなかで、利用者やその家族、自分の家族、自社の事業所の安否確認に奔走した介護従事者も数多くみられました。

そうしたなかで、インタビューでみられた、被災直後に介護従事者の抱える課題として、以下のようなものがあげられます。

仕事と家族の狭間の葛藤

家族の安否がわからないなかで不安を抱えながら、一方で、ライフラインの途絶など平常時とは異なる環境のなかで目の前にいる利用者を介護するという葛藤を抱えていたことがあげられます。

有料老人ホーム

津波により施設の1階が浸水し、利用者を2、3階に避難させたが、その際に逃げ遅れた利用者を水の中から救助した。施設が孤立状態になったため、3日間、施設の中で利用者と一緒に避難した。また、電話がつながらないため、救助を求めるメッセージを書いたシーツを屋上に掲げた。その後、他の施設の一角を借りて利用者と避難を続けることになり、元の施設に戻るまでに7か月かかった。

平常時と異なる過酷な環境によるストレス

事業所や避難所での泊り込みによる24時間対応への疲れや、それに伴い、一人になれる時間がないといった、平常時とは異なる就業・生活環境下でのストレスを指摘する人もみられました。

先行きへの不安

泊り込みによる24時間対応といった過酷な状況がいつまで続くのかが不透明であったり、被災した職場がいつ再開するのかといった先行きへの不安感も課題としてあげられていました。

●●●復旧への移行

東日本大震災の被災地では、震災発生直後の混乱から復旧期、さらには復興期に移行するなかで、介護従事者を取り巻く環境も変化しています。その環境の変化の一つとして、事業の再開、あるいは普段の事業体制への回復などがあげられます。介護従事者からみると、被災直後の非常時対応から段階的に平常時の勤務に戻ってくる時期となります。

その時期については、それぞれの事業所の被災の状況によって異なります。発災後1か月以内に普段どおりの体制に戻した事業所がある一方、甚大な被害を受けた施設では、その復旧までの数か月にわたり避難先での対応が必要になった例もみられました。

そうしたなかで、インタビューでみられた、この時期の介護従事者の抱える課題として、以下のようなものがあげられます。

グループホーム

管理者として、震災後のストレスを抱えるなかで、事態を明るくするためにもっとこうやったらいいんじゃないかというアイディアがなかなか出てこなかった。そうしたなかで辞めていく職員も出たが、その理由として、利用者が亡くなった精神的ショック、自分が家族に会えないなかで終わりの見えない介護を続けなくてはいけないという辛さ、普段と違う環境のなかで日々のケアがうまくいかないといった、もやもやとしたものが溜まっていく毎日に疲れたところもあったと思う。

非常時対応の長期化によるストレス

利用者と一緒の避難が長期化した介護事業者では、先行きが不透明ななかで目の前のことに対応するのが精一杯な状況が続くことに疲れを感じたという声が聞かれました。また、この時期に職場内での不満が顕在化したという声も聞かれました。

混乱からの解放による疲れの顕在化

震災直後の混乱期の目の前のことに精一杯な状況から開放され、一段落したことを意識することで、この時期に心身の疲れを意識するようになったという声が多く聞かれました。また、それをきっかけに離職を考えたという声もありました。

●●●現在

東日本大震災から２年が経過し、被災地で復旧・復興が進むなかで、インタビューにお応えいただいた方々も、普段に戻ったという声が数多く聞かれました。また、そうしたなかで、時間の経過とともに、被災直後の大変だったこと、つらかったことの記憶が薄れつつあるという声も聞かれました。

一方、「被災後から仕事の面で連続している部分はまだあって、終わった感覚が全然ない」という声や、「あのときの選択が一番よい選択だったのか」、あるいは「あのときこうしていればという思いが残っていて、未だに考えることがある」といった声も聞かれました。また、家族に被害があった方からは、「日常のなかでその被害を意識してしまう」という発言もありました。このように、被災地の介護従事者においては、業務が普段に戻ったなかでも、精神的な面では被災の影響が色濃く残っていると考えられます。

また、被災地の介護従事者を取り巻く状況として、インタビューにお応えいただいた方

デイサービス

震災直後は何をしていいかわからないが、何かをしなければいけないという状況だったが、時間が経って、落ち着いて自分のなかで消化できる状況になってきた。普通に生活できていることに幸せを感じるようになった。

デイサービス

現在、毎日の営業は平常に戻っているが、うちの施設を本当に好きだとおっしゃっていただける利用者さんに来ていただけていたので、震災前から同様の施設を地域の中で広げていくことが自分の役割と思っていた。その矢先に、震災が来てしまって、震災直後は収入も落ちたし、現在では不動産価格が上がってしまい、震災前に思い描いていたものが足踏み状態にあるという面では未だに平常には戻っていないという気がする。

のうち、経営者や事業所の管理者の方からは、復旧・復興が進むなかで、復興需要に伴う他業種での雇用環境の改善に伴い、介護職員を募集しても応募が少なく、人材の確保が困難になっているという指摘が数多く聞かれました。また、不動産価格の上昇など、震災前に描いていた事業展開が困難になっているといった事業環境の変化も指摘されています。

2 仕事を続けるきっかけ

今回、インタビューにお応えいただいた介護従事者は、前述したような東日本大震災に伴う体験を経ながら、現在も介護の仕事を継続している方々です。ここでは、そうした介護従事者が、仕事を続けるうえで支えとなったもの、変化のきっかけとなったものは何かについてインタビュー結果から整理します。

●●●非日常から日常に戻ったと感じるきっかけ

インタビューでは、数多くの介護従事者が現在は普段の生活に戻ったと発言していましたが、被災という非日常から日常に戻ったと感じたターニングポイントはどのようなものだったのでしょうか。

被災地の介護従事者が置かれている状況は、施設で利用者のケアをしていた人、利用者を送迎中だった人、休暇や出勤前後で自宅にいた人など、人によってさまざまです。そうしたなかで、被災という非日常から日常の状況に戻ったと感じたきっかけもさまざまですし、その時期についても数週間～数か月と人によって違いがみられます。

たとえば、ライフラインが復旧し、数週間ぶりに風呂に入れた、しばらく会えなかった

訪問介護

家族が無事で、その家族が仕事に行っていいと支えてくれるので、安心して仕事ができた。親の姿をみて子どもも介護に興味をもつようになった。家族が一人でも欠けていたら辞めていたかもしれない。

有料老人ホーム

利用者と一緒に避難するなかで、ストレスから辞めようと思ったこともあったが、一緒に頑張っている職員が頼りにしてくれている状況で、投げ出して辞めるわけにはいかないと感じた。

グループホーム

同じ職場だけでなく、他の部署からの支援も含め、震災があったからこそ社内の人間関係の近さを感じて一緒に頑張れたし、同じ職場の同僚とは避難先から戻りたいという連帯感が生まれた。

家族に自宅で会えたといった、私生活面のきっかけから日常に戻ったと感じた人がいる一方、避難所が閉鎖されて利用者が仮設住宅などに移った、あるいは被災した事業所の改修が終わって避難先から利用者と一緒に戻ったといった、仕事面のきっかけから日常に戻ったと感じる人もいました。

このように、きっかけの内容はさまざまですが、それぞれの介護従事者にとって震災前に日常的にあったものを具体的に体験することが、日常に戻ったと感じるきっかけになっていると考えられます。

一方で、時間の経過のなかで日常に戻ったと感じている人のなかには、目に見えるかたちで震災に区切りをつけたいという声も聞かれました。

家族や同僚、利用者が被災した介護従事者からは一周忌などの法要を契機に気持ちの区切りをつけたという人もみられました。

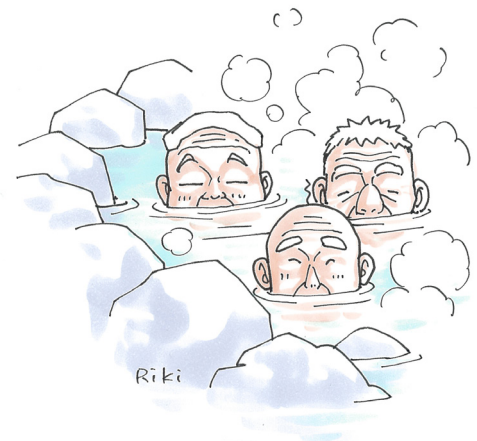
●●●仕事を続ける理由

東日本大震災の被災地では、発災後の過酷な状況への疲れや先の見えない不安、自宅の被災による避難など、さまざまな理由から、震災を契機に介護の現場を離れる介護従事者も少なくありません。

インタビューでは、そうしたなかで、震災後も介護の現場で仕事を続ける理由についても話を伺いました。

同僚との関係

過酷な状況下で仕事を続けることができた理由の１つとして、同僚との人間関係があ



げられます。一緒に頑張っている同僚に対する責任感や、同僚との連帯感が支えとなったという声が聞かれました。

家族の支え

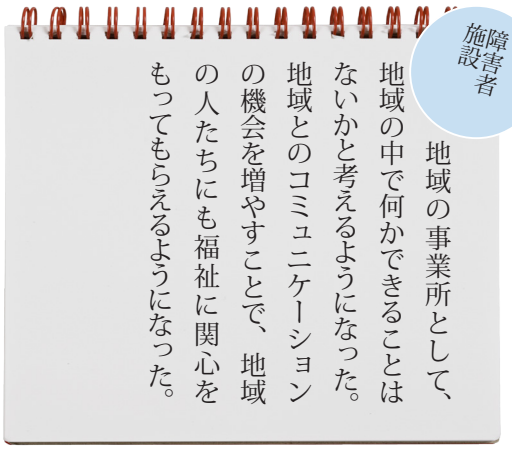
家族をもつ介護従事者からは、家族が無事であったことや、家族の理解と支えがあり、家族から行って来いと言われたことで、非常時でも安心して仕事を続けることができたという声が聞かれました。

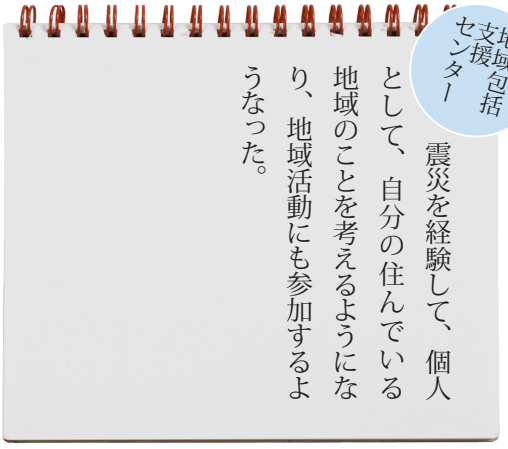
役割・期待への責任感

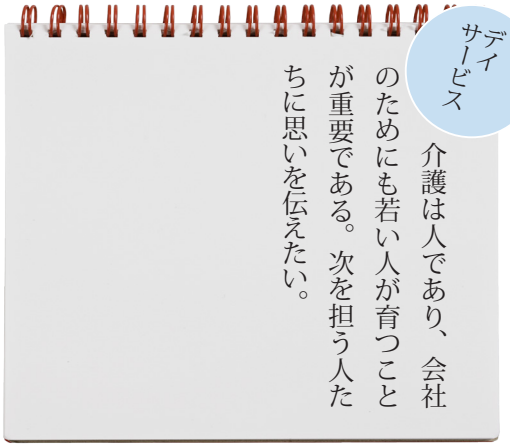
専門職としての利用者に対する責任感や、震災を契機に新たに社内で与えられたミッションが仕事へのモチベーションになったという介護従事者もみられました。

3 今後に向けて

以下では、インタビュー結果のなかから、東日本大震災の介護従事者の方が、被災体験を通じて今後に向けて介護従事者が考えていること、震災体験から今後に活かすべきこと（教訓）について整理します。







●●●今後に向けて介護従事者が考えていること

地域とのつながり

今回の震災での経験をふまえ、地域とのつながりを意識するようになったという声が数多く聞かれました。地域の中での事業所間のつながりや、地域住民とのコミュニケーショ

ンの必要性を感じ、そのための取り組みに意欲を示したり、既に行動に移している介護従事者もみられます。

また、事業所単位だけでなく、介護職員が個人同士で横につながることの必要性も指摘されています。

人の育成

介護従事者のなかでも、経営者や事業所管理者の方から、震災を契機に法人内や職場内での人材育成の必要性を感じているという声が聞かれました。

また、法人内にとどまらず、地域の中での人の育成の必要性も指摘されており、そのなかには、将来の介護の担い手として期待される高校生などに介護の魅力を伝えていくことや、現場職員だけでなく、次世代の経営者や管理者を育てていくことの重要性を指摘する意見も出されています。

●●●震災体験から今後に活かすべきこと――教訓

インタビューでは、「忘れない」ことについて、被災地を忘れないでほしいと思っているというよりも、もし次があれば今回の経験を忘れず活かしてほしいという思いが伝わってきました。ここでは、被災地の介護従事者の方が今回の震災を経験して感じた教訓を紹介します。

身を守るための判断の重要性

東日本大震災を経験した介護従事者からは、災害時に自分や利用者の身を守るために、限られた時間のなかで逃げるかどうかといった判断を迫られることが指摘されています。判断力とともに、そのために必要な知識、判断の基となる情報の入手などについても平時から心がける必要があることが指摘されています。

地域のネットワークの必要性

災害時に支援を受ける際に、接点のない人に支援を要請することは難しいため、地域のなかで普段から接することで顔の見える関係を構築しておくことの重要性を指摘する意見が数多く出されています。特に介護職員の個人同士の交流やネットワークづくりの必要性が指摘されています。

目標、将来への見通しの必要性

被災地の介護従事者が、過酷な状況で仕事に対するモチベーションを維持・向上するためには、介護従事者がそれに向かって行動できるような短期的な目標や、将来の見通しを示すことが重要であると指摘されています。

支援のあり方の再考

被災地に対する支援について、現状ではコーディネーターがおらず、各団体が個別に行っている状況であり、アセスメントの重複などが生じているとの指摘があります。また、支援側がすべてをやってしまい、支援を受ける側の自立しようとする力を阻害しているといった指摘もみられます。今後の被災地支援を考えるうえで、生活の継続、自立支援、自己確立といった視点をもった支援のコーディネートが必要とされています。

本調査研究事業では、岩手県、宮城県、福島県で働く介護従事者を対象にアンケートを実施しました。ここでは、その結果をご紹介します。

被災の状況は？

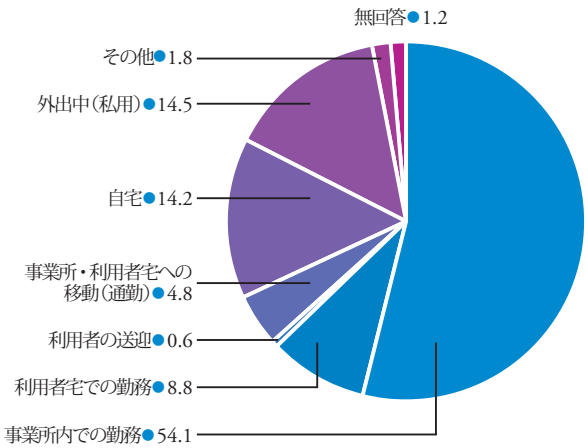
回答者の 2/3 は、事業所内や利用者宅、利用者の送迎など、勤務中に震災が発生しました。そのため、発災直後に事業所内や事業所から避難所への避難が必要となった人が 5 割強を占めています。また、発災直後に家族の安否確認が「必要だったができなかった」人が 4 割強おり、家族の安否を気にしながら勤務先にとどまっていた人が多かったことがうかがえます。

被災後の仕事に対する意識は？

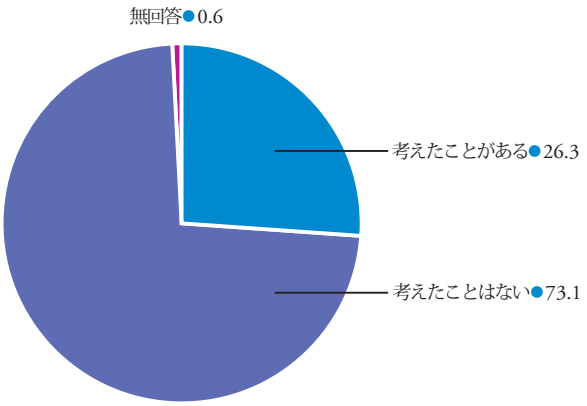
回答者の 1/4 が震災後に「離職を考えたことがある」としており、その理由として、「仕事に対する考え方の変化」「被災に伴うストレス」「被災後の勤務による疲れ」などがあげられています。

一方、6 割が今後も介護職を「続けたい」と回答しており、「続けたいと思わない」は 3.3％にとどまっています。また、就業を継続するための支援として、「スタッフ同士のミーティング」のような職場内の取組みの他、「同業種との交流会」や「外部のセミナー等への参加」など、職場外との接点をもつ機会があげられています。

発災時の状況

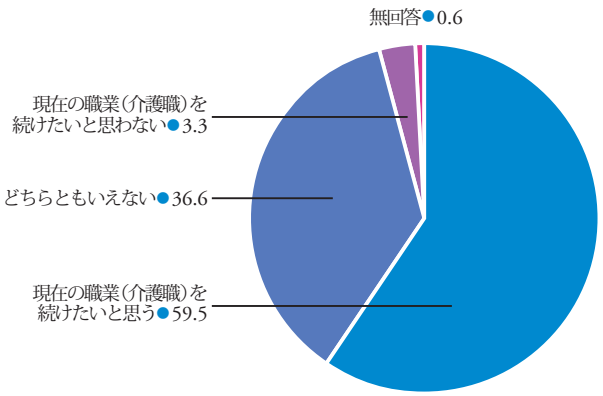


震災時に離職を考えたことがあるか

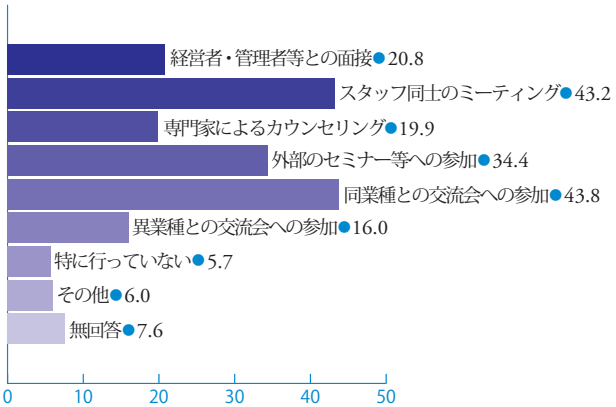


n=331

介護職の継続意向



介護職を継続するための支援



3 被災地の介護従事者が語る

Discussion & Workshop

平成23年7月、仙台市内で被災地の介護従事者らが集まり、東日本大震災の発災から3か月間の被災体験や介護現場での活動などについて語るイベントが開催されました。

それから1年が経過した平成24年7月、再び仙台市内で、宮城県仙塩地区で活動する「夜光虫。」のメンバーなどを中心に構成された実行委員会主催によるイベント「震災から500日――100通りのヘルプマン物語」が開催されました。

このイベントでは、介護をテーマとした「ヘルプマン」の作者であるくさか里樹さんのトークセッション、1年前のイベントの参加者によるその後の活動などについてのディスカッション、そして、発災から500日を振り返りながら介護従事者らが語り合うワークショップなどが行われました。

以下では、これらのプログラムのうち、ディスカッションとワークショップについて、その内容を紹介します。

開催概要

日時●平成24年7月28日［土］・29日［日］
会場●仙台市市民活動サポートセンター
主催●HELPMAN! JAPAN 実行委員会
内容●
くさか里樹さん（「ヘルプマン！」作者）トークセッションⅠ～Ⅳ
ディスカッション「震災から500日――ヘルプマン！震源地は…」
ワークショップ「震災から500日――100通りのヘルプマン物語」
ライブ etc.

ディスカッション

震災から500日
ヘルプマン！震源地は…

ディスカッションでは、被災地の介護従事者の支援を行っているNPO法人もんじゅ代表理事飯塚裕久氏がコーディネーターとなり、1年前のイベントのグループワークに参加していた被災地で介護・福祉に携わる4人の方とのディスカッションが行われました。

ディスカッションでは、発災直後から100日、さらには500日を振り返り、その時々の自分が置かれていた状況やそこで感じたこと、考えたことなどが語られました。そのなかで、出演者から、仕事上の変化として、利用者や同僚、家族、地域などとの「つながり」をよりいっそう意識するようになったという発言が共通して出されていました。

また、震災から1年以上が経過し、巷で「忘れない」という言葉が頻出している状況について、出演者の間で、過酷な体験を忘れてはいけないのか、あるいは、忘れないとすれば何を忘れないでおくべきか、次に活かせる教訓として被災地で起きていることを忘れないことが重要であるといった議論が行われました。

ワークショップ

震災から500日 100通りのヘルプマン物語

ワークショップでは、被災地の介護従事者ら約30名が参加し、6つのグループに分かれて、(1) 500日までの話（事実）、(2) 震災を経て自分が変わったこと（変化）、(3) これからどうやっていきたいか（復興）という3つのテーマについて語り合いました。

このうち、(1) 事実については、発災から現在までに自らに起きたことが語り合われました。職場、利用者の送迎中、自宅など発災時にどのような状況に置かれていたか、目の前で起きていることにどのような行動をとり、どのような葛藤を抱えていたかといったことについて、それぞれの参加者からさまざまな体験が語られました。

(2) の変化については、震災から1年が経過し、復旧が進み、普段の生活に戻りつつあるなかで、気持ちも元に戻ってきているという発言があり、震災直後の混乱から時間が経過するなかで日常に戻りつつある被災地の状況がうかがえました。また、震災を経験して、介護の魅力を再認識した、自分でできることと周りと連携することを意識するようになったなど、震災での経験が仕事に対する意識変化をもたらしているという意見もみられました。

(3) 復興については、仮設住宅を含めた地域との関わりの重要性や、地域内での介護事業者同士のネットワークの必要性についての意見が出されていました。

ワークショップでは、最後に各グループでどのようなことが語られたかを相互に報告し合うことで、参加者全体による情報共有も図られました。

4 介護従事者を支える取り組み

M o v e m e n t

東日本大震災から２年が経過し、時間の経過とともに、被災地の介護現場を取り巻く環境は変化してきています。

被災地の介護従事者へのインタビューでも、介護現場の状況が震災直後の応急対応から、平時に戻ってきたという声が数多く聞かれました。

一方、被災地では、震災を契機に介護現場を離れる介護職員も多いという指摘もあります。また、新たに介護職員を募集しても応募が少なく、人材の確保が難しくなっているとの指摘も数多く聞かれました。一般に、介護の現場では人材の確保が課題として指摘されることが多い状況にありますが、東日本大震災被災地では、被災に伴ってその問題が顕著に表れていると考えられます。

そうしたなかで、被災地において介護の担い手が継続的に就業していける環境を整備するかが重要な課題といえるでしょう。そのための取り組みの１つとして、介護の担い手のモチベーションの維持・向上をいかに図るかが重要になると考えられます。

ここでは、介護現場で働く人たちの交流促進やモチベーション向上にむけた活動を行っている、以下の３つの団体の事例を紹介します。

- 夜考虫。
- NPO法人もんじゅ
- 一般社団法人日本介護アカデミー

このうち、「夜考虫。」は、被災地で実際に被災をした介護職員が多数参加してイベントなどを開催しており、「NPO法人もんじゅ」についても、東北地方でミーティングを開催した実績があり、被災地の介護職員に対する支援を積極的に行う意向をもっています。

もし本稿の読者の中で、介護の現場で働くうえでの悩みを共有したい、現在直面している課題を解決したいという思いをおもちの方は、こうした団体に連絡をしてみてはいかがでしょうか。

夜考虫。 Yakochuu

「夜考虫。」は、宮城県仙塩地区を中心に介護・福祉業界で働く多様な職種の若手経営者・リーダー・職員・行政関係者らが、組織の垣根を超えて「夜に」集まり、時には酒を酌み交わしながら、職場の課題、地域ケアや日本の介護の未来を真剣に「考え」、語り合うことを目的としたインフォーマルな組織です。

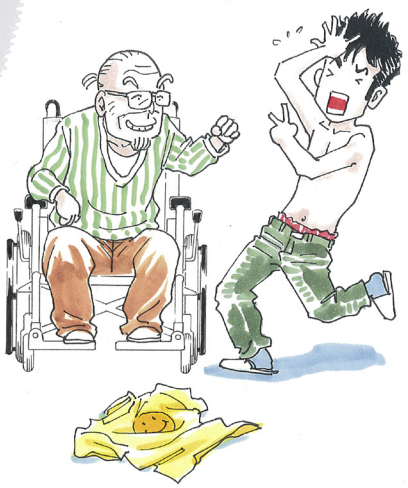
同団体は、東日本大震災の発生直前に立ち上げ準備を進めていましたが、キックオフミーティングの日に震災が発生し、メンバーの多くは、仙台市や多賀城市などの職場で利用者や職員と一緒に被災し、利用者の救助や利用者とともに避難生活などを経験しました。

震災の影響により、当初想定していた交流を中心とする活動内容は大きく変化し、メンバーが協力をして自宅などに残る被災高齢者の見守りやケアなどを実施するなど、インフォーマルなネットワークの強みを活かした被災地の介護の担い手として活動しています。

被災地において一定の復旧が進んだ現在では、当初の目的であった交流会を開催するとともに、東日本大震災から 100 日が経過した平成 23 年 7 月には、マンガ「ヘルプマン！」の作者であるくさか里樹さんらを招き、被災体験やそこで得た教訓、復興への思いを語り合うイベント「ヘルプマン！震源地は… ――リアルヘルプマンの挑戦」を開催しました。また、震災から 500 日後の平成 24 年 7 月には、「震災から 500 日――100 通りのヘルプマン物語」を開催しました。

最近では、NPO 法人もんじゅとのコラボレーションによる「もんじゅミーティング」や、被災体験を語る企画なども手がけています。

所在地●宮城県仙塩地区
設立年●平成 22 年
代表者●小野憲幸
URL●http://yakoutyuunowa.jugem.jp/



NPO法人もんじゅ

M o n j u

「NPO法人もんじゅ」は、若手介護職員が悩みを抱えても相談をする場がなく、介護業界から離れていってしまうことを危惧していた飯塚裕久氏が、介護ルーキーが組織の壁を越えて自由に相談ができる場の必要性を感じ、設立したNPO法人です。

同法人の活動の中心は、「もんじゅミーティング」とよばれる集まりです。このミーティングでは、介護現場で悩みを抱える若手職員（コドモ）1人が、自分の職場以外の管理職など先輩職員（オトナ）2人との1時間の対話を通じて自ら解決策を見つけていくものです。ミーティングでは、課題の整理とありたい姿の明確化、ありたい姿に向けて明日から実行できるアクションプランを導くことが求められ、「オトナ」はコーチングの手法を用いて、「コドモ」の気づきを支援します。

導かれたアクションプランは、その後の実施状況に対するモニタリングが行われ、どのように状況が変化したかが確認されます。「どのような課題に対して、どのようなアクションが行われ、どのように状況が変化したか」という一連の流れは、「もんじゅ報告書」として整理されます。この報告書は、同法人のホームページなどで公開することで、全国で同様の悩みを抱える若手介護職員とナレッジシェアすることを目指しています。

同法人の活動は、首都圏のみならず全国に広がっており、東日本大震災の被災地である宮城県でも前述した「夜考虫。」と連携してミーティングを開催しています。代表である飯塚氏自身、ミーティングを通じて悩みや不安を共有する機会を提供することで、被災地での介護離職を防ぎ、介護現場発の地域復興を支えていきたいと考えており、今後も被災地域でミーティングを積極的に開催していくことを予定しています。

所在地●東京都文京区
設立年●平成22年9月（平成23年法人認可）
代表者●飯塚裕久
URL●http://www.npo-monju.jp/

一般社団法人 日本介護アカデミー

N i h o n K a i g o A c a d e m y

「一般社団法人日本介護アカデミー」は、群馬県桐生市で有限会社プライマリーを経営する梅澤伸嘉氏が開催していた地域での介護職員交流会が母体となって設立された団体です。日々の業務に悩んでいる介護業界の若手職員に元気になってもらいたいと考えた梅澤氏は、独自に交流会を開催していましたが、交流会での生き生きとした若手職員の笑顔を目にした梅澤氏は、こうした交流会はプライマリー 1 社のものではなく、業界全体に広げていかなければならないと考え、社団法人格を取得しました。

同法人では、介護業界向けイベントである「介護業界活性化交流会」、地域向けイベントとして、昔ながらの遊びや食べ物を通じて地域の高齢者から子どもまで世代を越えて共に過ごすイベント「忘れていた贈り物」などを開催しています。

このうち、「介護業界活性化交流会」は、地域の介護事業所で働く人が、職業や経験を問わずに集まり、対話を通じて現場での悩みを共有したり、情報交換したり、介護に携わっている人同士が出会い交流できる場として定期的に開催されています。

同法人の交流会の進め方は非常にシンプルで、「なぜ介護を始めたのか？」といった特定のテーマを決め、参加者を職種や抱えている課題ごとの小グループに分けて、同じ悩みを抱える仲間同士で自由闊達に語り合っています。交流会の参加メンバーは、常に顔見知りだけが集まるといった固定的なかたちではなく、テーブルごとに参加者の話を引き出すファシリテーターを配置するなど、多くの人が参加しやすく、楽しく話しやすい場の雰囲気をつくる工夫も行われています。これまでの参加者は 400 人を超え、開催地域も桐生市から前橋市や高崎市など群馬県全域に拡大しています。

所在地●群馬県桐生市
設立年●平成 21 年
代表者●梅澤伸嘉［有限会社プライマリー代表取締役社長］
URL●http://ameblo.jp/kaigoacademy/

おわりに

平成23年3月11日に発生した東日本大震災から2年が経過しました。その間、被災地の状況は刻々と変化し、それに伴って介護従事者を取り巻く環境も変化してきています。

本調査研究事業では、インタビューを通じて、被災地の介護従事者が抱える問題（時間経過による変化）、仕事を続けるうえで勇気づけられたこと、今後に向けて考えていることや震災体験から今後に活かすべきことなどについて検討を行いました。

たとえば、現在、被災地では、復興が進められるなかで介護人材の確保が難しい状況にあります。一方、介護の分野では、地域の中で人を育てる必要性が高まっていると思います。なかでも、将来的な介護の担い手として期待される高校生などに介護の魅力を伝えていくことや、次世代の経営者や管理者の育成は重要になってくるでしょう。そのためには、イベントを含めたさまざまな媒体の中から上手に活用していくことも重要です。

また、地域の中の介護事業の地域ネットワークというと、従来、事業者連絡会のような事業者単位のネットワークが主であり、個々の介護従事者の横のつながりはあまりみられませんでしたが、今後も、介護従事者が個人でつながっていくようなネットワークづくりが重要になると思います。その際、従来のように目的によって人が集まるのではなく、人が集まって共通の目的をつくっていくような、新たな視点でのネットワークづくりが求められています。また、介護事業者だけでなく、地域社会とのネットワークづくりも重要となります。また、それらのネットワークが東日本大震災のような災害時に機能するためには、地域の中で平時から顔の見える関係づくりを行っておくことも重要です。

こうした東日本大震災の経験によって、被災地の介護従事者が感じた教訓が、今後の介護従事者に生かされることを期待しています。

有識者研究会委員●井上博文

東日本大震災被災地における介護従事者の就業意識等に関する調査研究事業
有識者研究会委員名簿

有識者研究会委員

［氏名五十音順●敬称略］

氏名	所属
飯塚裕久	NPO法人もんじゅ代表理事
泉啓司	株式会社成和サポートハートフルデイふくろうの森課長
井上博文	シンフォニーケア株式会社常務取締役 小規模多機能型居宅介護シンフォニー将監施設長
梅澤信嘉	一般社団法人日本介護アカデミー代表理事
尾崎純郎	株式会社harunosora代表取締役
宮島渡	社会福祉法人恵仁福祉協会アザレアンさなだ総合施設長

事務局・調査主体

［株式会社浜銀総合研究所］

氏名	所属
添野好一	地域戦略研究部社会システム研究室主任研究員
田中知宏	地域戦略研究部社会システム研究室副主任研究員
加藤善崇	地域戦略研究部社会システム研究室研究員
小泉安史	地域戦略研究部社会システム研究室研究員

平成 24 年度老人保健健康増進等事業
「東日本大震災被災地における介護従事者の就業意識等に関する調査研究」
東日本大震災の介護従事者支援に関する事例集

平成 25 年 3 月発行

発行●編集
株式会社浜銀総合研究所
〒220-8616 神奈川県横浜市西区みなとみらい3-1-1
TEL045-225-2372　FAX045-225-2197
http://www.yokohama-ri.co.jp/

H I G A S H I N I H O N D A I S H I N S A I

K A I G O J U J I S H A - J I R E I S H U